



石原は、八木章一のことを激しく嫌っていた。憎んですらいいた。

石原には、人脈があった——自他共に認めるその人脈を使い、石原は事あるごとに、八木に対して妨害工作を仕掛けた。どんなに姑息と言われようが、構わない。それが石原の心中であった。

しかしながら、石原が周到に練り上げたはずの工作が、何故かうまく行った試しがない。大抵は八木がのらりくらりと、いつの間にか石原渾身の罠から逃れているか、工作自体が徒労に終わるか。時には石原自身が逆に火の粉をかぶる羽目になった。

それでも石原は、章一に対する工作を止めるつもりはなかった。たった一度でもいい、八木を自分の支配下に置いて屈服させるか。八木のプライドを、ぶっ潰してやりたいと、八木の面を見る度に思うのであった。

石原の心がこんなにも歪んだのは、さほど昔の話が元ではない。
つい半年ほど前だ。

今回の交渉は社運を掛けて臨んでくれと、石原は常務の山本と専務取締役の桂から直接、会議室で手を握られ肩を抱かれて、強く発破をかけられた。

石原自身、他のどの部門の、どの社員よりも抜きんできていると皆が認めるところであった。まだ28と若い、何か大きなプロジェクトさえまとめれば、いきなり部長にでも昇進するのではと囁かれるほどだった。

石原は、本社きっての出世頭としてこの交渉を成功させ、営業部内での評価だけでなく、会社内全体での人事考査を是非にも上げたいと思っていた。

もちろん一つは昇進のため。

そして石原自身の、社内随一というプライドのためであった。

交渉相手の会社は、石原と八木が勤めている松吉総合株式会社とは比べものにならない大企業だ。一部上場企業である。松吉総合は、中小とまでは言わないまでも、名刺が自慢できるようなブランドのある会社ではない。

山本や桂を初めとする常務たちは、今回の業務提携契約を、是非にも松吉総合に有利な形で落としたいと考えている。石原は当然のようにそう捉えた。この契約が取れば、松吉総合の名は全国規模を超えて、ナショナルブランドにすらなりうる——役職たちはそう考えているに違いないと、石原は踏んでいた。だからこそ、役職者の中でも主流派で、実力があると言われる二人から直接、まだ30の声も聞かない若さ故に肩書きもほどほどの自分が声をかけられたのだと、使命感とともに圧倒的な優越感を誇っていた。

しかし、そんな前提のなにもかもが、プレゼン予定日の4日前に、思わぬ形で消し飛んだ。

くだんの八木章一が、部下も同僚も連れずどうやら一人で、その契約を取ってきたのだ。しかも、八木が結んだ契約条件は松吉に相当有利で、得られる計算上の純益は、予定されていたプレゼンを介した想定純益の3割増しにもなった。

八木の「偉業」は瞬く間に社内を駆け巡ったが、誰もそれを賞賛はしなかった。スタンドプレーで皆の頭越しに勝手にやったから、というものではない。即日の役員会で、過半数の役職たちが八木の独断行動を徹底非難し、その行動に対して懲戒処分を科したからだ。

とは言っても、会社にとっての利益があまりにも想定外に莫大であったため、上長である出納課長が

「まあ……目立つのはそれくらいにしておけよ、八木」

と一言伝えただけだった。まるで形式的な処分ではあった。

八木の独断行動により、社は大きな利益を確保した。

そして「異端児」八木は、適切か否かはともかく会社の規律の中で処分が下された。

そしてその異端児は、懲戒処分に不服を訴えるでなく、いつも通りの業務を淡々とこなす日々に戻ろうとしていた。

誰も不幸にならないかと思いきや、一人、コイツ呪い殺してやろうかという視線を社内にまき散らしている者がいた。

他ならぬ、石原である。

八木は、前々からスタンドプレーをすることがあったようだった。行動自体が決して目立ちはしなかったため気付く者も少なかったらしい。今までは。

しかし今回は、八木の行動自体は隠密に徹していたが、結果があまりにも大きすぎて、誰の目にもそのスタンドプレーがおおっぴらになった——そう石原は結論づけた。

八木章一、30歳。経理部出納課出納係、の平社員である。

石原は更に血まなこになって、八木のことを聞いてまわった。

八木は、性格的にも目に付くような話もなく、むしろ「誰も知らない間に」いつの間にか動いているような、影のような存在と、誰もが口をそろえた。また石原の見立てでも、確かにそのように感じられた。背丈も体格も小柄で、言われた金銭を出し入れするだけの出納係が板に付く、細々したような雰囲気のない人間、と。

そんな奴が、とんでもないそして業績を上げたからと言って勝ち誇るでもなく、淡々と自分の、財務部出納課出納係の仕事をしている。

何故八木が、自分の領分でもない業務提携契約を取ってこられたのか、誰もよく分からない様子であったが、社の業績に著しく貢献している以上、上司から叩かれていることも無いようであった。

というよりも、出納課長を含め財務部全体として、八木にはさほど厳しくなく、むしろスタンドプレーも暗に容認しているかの如く、甘かった、と言った方が事実に近いようにすら、石原には感じられた。

なぜ財務部は石原を擁護するんだ。

なぜ常務たちはあんな形式的処分だけで済ますんだ。

なぜヤツは俺の好機を奪った！

自分が会社の若き英雄として讃えられるかも知れなかった場面そのものを、八木が消し飛ばしたのだから、八木は呪われても然るべきだ。そんな殺気に似た雰囲気を部内で振りまく石原は、日を追うごとに部内でも孤立していった。更に、目立たず弱々しい雰囲気の石原に対して露骨なまでの妨害工作を仕掛け続け、しかもそれがことごとく空振りに終わった結果、石原の地位は失墜していった。これまで持っていたはずの人脈も次第に疎遠になり、半年もすると、いよいよ社内ですべて完全に孤立してしまった。

石原は、怨念と覚悟と長い柳刃包丁とを胸に抱え、月締めで社内に残っていた八木を、誰もいない会議室に呼び出した。

「呼ばれたから来たけど一、石原君」

八木は、何の警戒感も持たないような様子で会議室のドアを開けて、言った。

「ああ。月締めで忙しいのによく来てくれたね。感謝するよ」

「締めにまだ時間掛かりそうなんだけど、石原君は僕を、用件があって、呼んだのかな？」

その言い方には、年上の余裕というよりも、何かを察している様子があった。

「……理由なんて、言わなくても分かってるんだろ、八木さん」

「そんなとげとげしい言い方しなくても」

苦笑いをした八木だったが、その仕草は石原には、その場を取り繕って逃げようとしているように感じられた。

「八木さん、あんた、どうして俺が取るはずのあの契約、取ってきたんだよ。あれから俺は、完全に落ち目だ。同僚たちとの人脈も切れちまうし、部内でももう居場所がない。どうしてくれるんだよ!!」

「どうって……あの契約はね、あの会社だったから、僕が出張った方が確実だったんだよ」

石原の憎悪の眼力にうろたえたような様子で、八木が答えた。

「確実って何だよ、どうすればそんなのなんだよ!!」

「うーん、また会社に居づらくなりそうだけど……僕、あちこちの株主だから」

「はあ? 俺だって株くらい」

「いやそうじゃなくて、大半は、筆頭株主で」

「ひっ」

石原は、そううわずって、瞬間、事態を理解した。

どんな大会社であれ、筆頭株主、しかも個人が、直接会社を責めれば相当ダメージは大きい。同業他社に株を売られて吸収合併、なんて事もあり得るほど、存在感が大きい。圧力、という名の脅しをかければ、大抵のことは資本主義競争社会の中では、決着が付く。

しかし、八木には石原が、そんな獰猛な獣の性分を有しているとは到底思えなかった。

「じゃ、じゃあ何でこんな小さな会社で、出世も見込めないような会社で、出納係なんてやってんだよ……」

「だって、この会社、僕のだから」

「ぼっ……でも筆頭株主は、銀行……」

「一応そういう風にしてあるよ。でもその銀行、何で都市銀行じゃないと思う?」

「してあるって……まさか、資本で乗っ取るつもりで!」

「乗っ取るんじゃないくて、元から僕のなの。出納係やってるのは、そこで不正支出が無いから、確実にチェックできるから。せっかく僕のおじいさんが志を持って作った会社だからさ、潰したくないし、潰されたくないし」

「創業一族、ってこと……なのか」

「そう」

八木は、初めてその時、妖艶とも言える笑みを浮かべた。小柄で華奢な八木に、その笑みは嫌になる程よく似合うと、目の当たりにして八木は思った。

「創業者一族だけど、養子縁組で姓を変えてるから、誰も気づかない。むろん、桂さんとかも気づいてないと思うけど」

と、八木は明るく言った。その姿には、それまで八木が持っていた単に目立たない程度に明るいヤツ、というイメージは無く、逆に資本家が持つオーラすら感じた。

「じゃあ俺たちは、お前に働かされてるのか……」

「そんな卑屈な言い方しなくても。どこでどんな風に働くにしても同じじゃない？ どの会社社長ですら、元々は株主のために働くんだから。僕だって、おじいさんの遺志の為に働いてるようなもんだし」

「そん……そんなの、認めない、絶対認めない！」

石原が、スーツの胸に隠していた柳刃を出した、その瞬間を見透かしたように八木は大きく一回、パーンと手を叩いた。

その音とまさに同時に、会議室の照明が落ちた。

真っ暗になった会議室に、石原がいつも聞き慣れている、スクリーンが降りていく音が響く。そして、

「全部、録画されてるからね」

八木の声が暗闇に響いた。プロジェクターの駆動音がし、暗闇の中の八木と石原をとらえたりアルタイムの白黒画像が、スクリーン一杯に映し出される。

「君は、まだ働ける。十分に。もちろん噂通りの部長職どころか、役付きへの道だって、今こんな事態であっても、しっかり開けているよ、いや、開けておくよ。但しそれは、君が僕の秘密を誰にもあかさず、あのプレゼン以前の、不遜で尊大で傲慢、だけど着いていけばなんだか良い目が見られそうってオーラを、君がもう一度出せたら、って条件がつくけどね」

「俺は……働けない、そんな、もう」

「じゃあ、その柳刃で死んだらいい。君の残業時間は相当多いから、会社として労災認定をおろさせるよ。労災ってことで会社が悪い風にするから、死亡慰労金も出せる。そしたら親御さんも、奥さんの美紀さんも、二ヶ月前に生まれたご長男、鼎くんだったね？ 彼も立派に暮らしていける。」

「な……」

「会社を『所有』するって、こういうことだよ」

八木は、プロジェクターが照らす薄闇の中を柳刃を握ったままの石原の横を、何の躊躇もないように平然とした様子で、そして石原の肩をバンと、音を響きわたらせるほどに叩いて去っていった。

八木が会議室を出ると、プロジェクターが消えて、照明がついた。

全て監視下だったのか……石原が柳刃を会議室の机に、力無く置いたその時、自分の肩からひらりと付箋紙が床に落ちたことに気づいた。拾い上げてみると、

『10分後にメールチェックを。君ならこれで十分再起だ。』

と書かれていた。まるで最初から、全ての事態を読んでいたかのようなその文面に、ある種の戦慄を石原は覚えた。

石原は、死なない道に賭けようと思った。

不可思議で仕方がないが、再起が約束されているらしい。

よく分からない付箋紙が、妙な期待感を煽った。

会議室から自分のデスクに戻り、頃合いをみてメールをチェックすると、発信者名も件名もないメールが届いていた。誰からの発信か分からないメールが、フィルタリングされずに届く。それだけでも社内のメール規制システム上あり得ないことだったが、内容を見て仰天した。最大と同業他社を、三ヶ月前にこちら側の優位で吸収合併したという事実とともに、それが全く石原自身の手腕として行われたこと、そしてその吸収合併が今まで秘密にされていた、もっともらしい理由までもが書かれたワード文書が添付されていた。当然石原は何もしていない。その間は、社

内で愚痴を言いまくり、荒れていただけだった時期だ。

そして本文には、

会長室 三番ロッカー 2301

と書かれていた。背筋に冷たい電撃が走った。そこに契約謄本があるのだろうことは、もうこの完璧な理由付けのワード文書から、容易に推測が出来たからだ。

*

翌日。

社内は朝から騒然としていた。一時期は凋落した石原が秘密契約を獲得していた--そんな話題が、給湯室から会議室まで、社内全てを席卷していた。

石原は珍しく、財務部に出向いた。一直線で出納係のところに向かった。

「あれ、小口現金でも切れましたか」

「いや、大口契約をようやく公開出来る日が来たんでね。自慢ですよ」

そう言って石原は、昨晚なぜか無施錠になっていた会長室で手に入れた契約謄本を、八木に見せつけるようにした。

「さすが、営業部のホープですね。一度のトラブルでへこたれるほど弱くはないと思ってましたが、これは.....大きい事案ですね、合併ですか」

「吸収ですよ。また出し抜かれちゃかなわないんで今日まで秘密にしてたんで」

「ははあ、さすがに切れ者は違う」

小柄で華奢な八木が、気弱そうに苦笑いした。

横柄な様を振る舞っていた石原は、すっと付箋紙を八木のデスクに置いた。

『俺はやるぞ、絶対に』

「石原君、あなたなら本当に、噂を超えて、若年取締役になりそうですねえ」

八木は、まるで自分の出世レースとは関係ない他人事のように、苦笑いしながら言った。

(了)